

戦時の桶川 —戦時の学校と郷土の兵士—

展示期間

令和元年8月4日（日）～8月25日（日）

I 昭和の幕開け

大正12年（1923）9月に発生した関東大震災の復興から立ち直る間もなく、昭和は不況の中で幕を開けます。

この写真は、昭和4年（1929）4月に撮影された荒川河川改修工事の写真です。蒸気機関車にけん引された大型の掘削機とともに、誇らしげな男たちの姿が写っています。写真の裏には、次のように記されています。

「日賃一円弍十銭 人夫 近藤金作」

この工事は大正7年（1918）から続けられた大工事ですが、桶川付近の工事は昭和恐慌のころに行われています。不況の中で、桶川の人々はこの工事に参加して暮らしをたすけたそうです。



II 戦争への序章 満州事変から二・二六事件

昭和5年（1930）、日本は昭和恐慌と呼ばれる深刻な不況に陥りました。とくに、米価や繭などの農産品の価格の下落による農村の苦境は深刻で、社会不安を招くことになりました。

満州事変と政党政治

混乱の中で、浜口首相は暴漢に襲われて倒れ、これを引き継いだ若槻礼次郎内閣は、昭和6年（1931）に起こった満州事変への対応がさだまらないまま総辞職しました。

この内外の危機に対応するために、犬養毅首相と高橋是清大蔵大臣が、外交と財政を担うこととなります。

政党政治家として中華民国政府との交渉を模索した犬養首相は、昭和7年（1932）5月15日、海軍の青年将校らによって殺害されました。ここに政党政治家による内閣が終わりを告げ、昭和は戦争の時代へと移り変わっていきます。



アサヒグラフより

二・二六事件と郷土の兵士

二・二六事件は、昭和11年（1936）2月26日に陸軍の青年将校らが東京市内で起こしたクーデター未遂事件です。青年将校と行動をともにした歩兵約1,400人の兵士は首相官邸や内大臣邸、警視庁や新聞社などを襲撃し、この騒乱の中で昭和初期の政党政治を代表する大蔵大臣であった高橋是清も命を落としています。

以後、日本は、軍と官僚に主導されながら昭和の戦争に進んでいきます。二・二六事件に動員された兵士たちの半数は埼玉県出身者でした。彼らの多くは満州に送られ、やがて日中戦争の開戦を迎えます。



二月二六日〇三・〇〇突然非常呼集がかかった。スワッと飛起きてみると班内に電燈がついていて班長から「服装は二装着用、外套を着る、ゆっくり仕度せよ」との指示があった。

約一時間ぐらい行進した頃、大きな屋敷の付近で又銃休けいした。間もなく集合となり改めて出動目的を知らされた。

私は驚いた。目的とは鈴木侍従長官邸であり、これを襲撃して侍従長を倒すことであった。ここで各小隊の任務と行動が示され〇五・〇〇を期して襲撃を開始した。

『二・二六事件と郷土兵』所収 増田喬氏の手記より

III 日中戦争と国家総動員体制

二・二六事件の後、すでに国際連盟を脱退していた日本は、外交においては昭和11年（1936）に日独防共協定を締結してドイツとの連携を求め、国内においては軍備増強と戦時体制の構築を国の政策の基本と定めました。

昭和12年（1937）7月7日、北京市郊外の盧溝橋（ろこうきょう）で起きた日本と中華民国の軍事衝突をきっかけとして日中戦争が始まります。



アサヒグラフより

戦争と報道

昭和の戦争では、新聞の他に、新たなメディアとしてラジオ放送と写真雑誌（グラフ誌）が登場します。

市民から当館に寄せられた昭和12年（1937）の『アサヒグラフ』には、たびたび日中戦争特集が組まれ、掲載された報道写真は戦場と国民を結びつけていました。

昭和15年（1940）には、総力戦を遂行するための情報宣伝の機関として、内閣直属の「情報局」が設立されています。その統制のもと、国とメディアが一体となった戦時報道を通して国民は戦争と向き合うことになりました。



熊谷陸軍飛行学校桶川分教場

昭和10年（1935）に、航空兵科下士官となる生徒（少年飛行兵）や選抜された将校と下士官の基礎教育にあたる熊谷陸軍飛行学校が設立されました。

そして、熊谷陸軍飛行学校のもとで、日中戦争の開戦を目前とした昭和12年（1937）6月に、熊谷陸軍飛行学校桶川分教場が北足立郡川田谷村字若宮に開校しました。飛行場は、河川改修によって直線的に整備された荒川に沿って設けられていました。

桶川分教場では、少年飛行兵への基本教育が主に行われ、20期余り、推定1,500～1,600名の操縦者を戦場へと送り出しました。



下士官90期石井貞助氏のアルバムより



『少年倶楽部』昭和12年



『少年倶楽部』付録 神風号

付録のペーパークラフトの「神風号」は、試作軍用機の払い下げを受けた朝日新聞の社有機で、昭和12年（1937）4月に、イギリス国王の戴冠祝賀に向い、立川飛行場からロンドンまでの間15,357kmを94時間17分56秒（実飛行時間51時間余）で飛ぶという快挙をなしとげました。

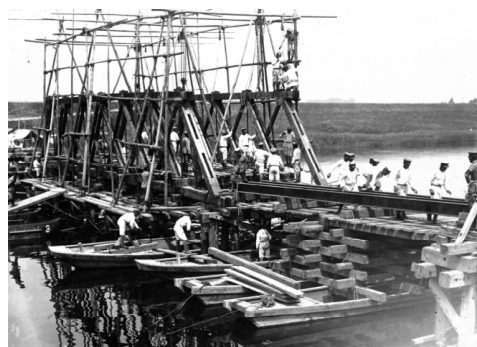
国産の飛行機が、日本人パイロットの操縦で記録を達成したことから、国民は熱狂し、少年たちに空へのあこがれを呼び起こしました。

日中戦争と郷土兵 ー出征から復員までー

昭和12年（1937）8月、日中両軍の交戦が拡大していく中で、政府は陸軍2個師団を上海に派遣することを決定しました。派遣された兵士の中に桶川町の大工、島村源三郎さんがいました。

島村さんは、工兵第一連隊留居隊に召され、同日第一師団渡河材料中隊に編入されました。工兵は、橋梁や鉄道の敷設、飛行場の建設など軍の交通の確保を担いました。

上海、徐州、宜昌などの激戦地をくぐり抜けた後、島村さんは、昭和15年（1940）11月15日に交代のため南京港を出発して20日に宇品港に帰還し、25日に召集解除となりました。



渡河訓練 島村等氏のアルバムより



支那事変従軍記章

IV 太平洋戦争と国民の暮らし

日中戦争終結の糸口が見えない中で、日本は、昭和15年（1940）9月に日独伊三国同盟を締結し、昭和14年（1939）に始まった第二次世界大戦における枢軸国の一翼を担うことになりました。

やがて、アメリカ合衆国との対立は決定的なものとなり、昭和16年（1941）に入ると、石油をはじめとする戦略物資の対日禁輸をめぐる交渉が続きましたが、8月には行き詰まります。

昭和16年12月8日のハワイの真珠湾奇襲と同時に日本は英国とアメリカ合衆国に宣戦布告し、太平洋戦争が始まりました。開戦と同時に日本軍は、資源の確保を目指し、太平洋に戦線を拡大していきました。



防空訓練（桶川町）

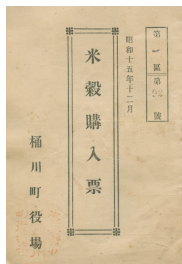
総力戦と国民生活

太平洋戦争が始まる直前の昭和16年（1941）に国家総動員法が改正され、統制は勤労動員、食料や生活物資、さらには言論の統制へと拡大し、すべての国家の資源が戦争遂行のために使われる総力戦体制が出来上がっていきます。

国民は、「進め一億火の玉だ」のスローガンのとおり、老若男女を問わず、総力戦への参加を求められました。徴兵によって成人男性は戦地におもむき、女性や学生たちが、いわゆる「銃後の守り」を担うことになり、労働や防空などの負担も増していきました。



『主婦の友』昭和17年



米穀購入票



戦時貯蓄債券

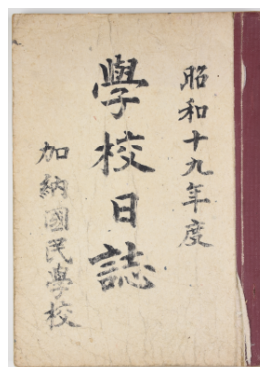
太平洋戦争が始まると、生活物資の不足はいつそう深刻となっていました。主食である米は、昭和16年（1941）4月からは、通帳による配給制となりました。

膨大な軍事費をまかなうために、国が発行する貯蓄債券の購入が近隣組織や職場などを通じて割り当てられ、人々は半ば強制的に協力を求められました。

戦時の学校と少国民

昭和16年（1941）4月1日、国民学校令が出され、それまでの尋常小学校と高等小学校は国民学校と改められました。子どもたちは、「少国民」と呼ばれ、戦時の総動員体制にあって大人と同様に国民としての義務を果たすことが求められました。

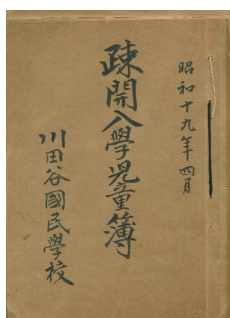
とくに、勤労が教科教育とともに重視され、農作業などに従事しなければなりませんでした。当時の学校日誌にも、「田植作業」「栗毬集め」「薄穂取り」といった勤労奉仕作業の記述を見ることができます。



学校日誌 加納国民学校



加納国民学校



疎開入学児童簿



集団疎開顕彰碑

昭和19年（1944）6月に日本本土を目前とするサイパン島への攻撃が始まるとまもなく、学童疎開が始まります。昭和19年の「疎開入学児童簿」には縁故をたよって川田谷村にやってきた疎開児童名が記載されています。

集団疎開も行われ、加納の光照寺では日本橋久松小学校の女子児童58名を受け入れています。光照寺の境内には、当時児童を世話した住職夫妻への顕彰碑が建立されており、その碑文によって一端を知ることができます。

熊谷陸軍飛行学校桶川分教場と伍井中尉

昭和18年（1943）6月に首相兼陸軍大臣の東條大将は、航空を重点とする軍備建設を指令しました。陸軍は、大学をはじめとする高等教育機関の在校生や卒業生を対象として短期間で操縦者を育成することを目指し、特別操縦見習士官制度が発足しました。

志願した学生たちは学鷲と呼ばれ、わずかな基礎教育と操縦訓練によって士官となりました。彼らは、操縦者として十分な技量を身につけないまま戦闘に参加し、特攻にも動員され、多くの犠牲者を出しています。

熊谷陸軍飛行学校とその分教場は、特別操縦見習士官を積極的に受入れています。その募集宣伝のために、朝日新聞社は、写真報道『学鷲—陸軍特別操縦見習士官—』（昭和19年8月30日発行）を刊行しています。



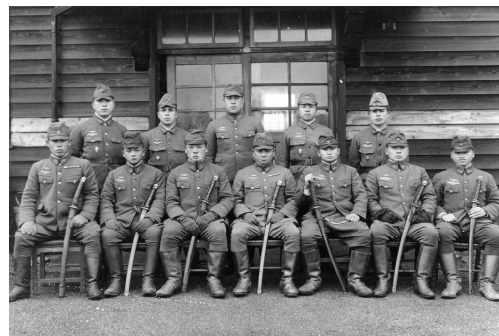
『学鷲』朝日新聞社



白田智子氏のアルバムより



出撃前の伍井大尉と第23振武隊 壬生飛行場にて



『学鷲』に掲載されている写真の多くは桶川分教場で撮影されており、取材を担当したのが伍井芳夫中尉であったと伝えられています。伍井氏は、明治45年（1912）7月に加須市（旧大利根町豊野）に生まれ、航空士官学校を経て熊谷陸軍飛行学校の教官となりました。下士官時代から桶川分教場の教官もつとめ、桶川町に家族とともに暮らしていました。

昭和20年（1945）2月に、熊谷陸軍飛行学校は閉鎖され、航空師団の一部とされました。飛行学校とともに生きてきた伍井中尉にも昭和20年2月28日に陸軍特別攻撃隊第23振武隊隊長の命が下り、特別操縦見習士官出身者を含む隊員12名は3月27日に栃木県壬生飛行場を発って鹿児島県知覧飛行場に向かいました。

3月31日に出撃命令を受領。4月1日早朝、知覧飛行場から沖縄に向けて出撃されています。

南太平洋の郷土兵 — 出征から復員まで —

連合軍の反攻が本格化する昭和17年（1942）になると、中国戦線から南太平洋の前線へと、兵士が送り込まれていきました。

このころになると、兵士は兵役が終わっても故郷に帰ることなく、現地召集されたまま転戦を繰り返しています。



川田谷出身の小川さんは、中国湖北省から南方に向かい、昭和17年11月にブーゲンビル島に上陸しています。ここは激戦地であり、多くの兵士が犠牲となっている中で、小川さんは生き抜き、終戦を迎えました。

昭和21年（1946）2月22日、小川さんは無事故郷に復員を遂げました。小川さんは、戦後も、復員した折に身につけていた軍装品を大切に手入れしていたそうです。苦しいときも自分とともにあり、自分の身を守ってくれた品々に思いを寄せていたのかもしれない。

そして、これらの品は、現代の私たちに、従軍した郷土の兵士の暮らしを伝えています。



小川徳治氏の出征 樋詰水川神社



略帽と軍衣

背囊（大正6年製）

携行薬
クレオソート丸 錠剤